

2023

3

令和5年3月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻355号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあるお



さわやか福祉財団

4月24日(月)

子ども・子育て市民委員会 シンポジウムを開催します!!

安心して子どもを生み育てられる社会の実現を目指して、
昨年8月に発足した「子ども・子育て市民委員会」では、
2023年度第1回シンポジウムを以下の通り開催いたします。



4月24日(月)

13:20~16:30 予定

会場：砂防会館・別館

東京都千代田区平河町2-7-4

(会場参加とオンライン配信のハイブリッド開催)

詳細は、追って本誌4月号、子ども・子育て市民委員会
ホームページや当財団ホームページでご案内いたします。

すべての子どもが健やかに育つ社会の実現には皆さんの力が必要です。
市民自らが声を上げ、活動を起こしていくために、同市民委員会ホーム
ページにアクセスいただき、ぜひご賛同および応援メッセージをお寄せ
ください!

*子ども・子育て市民委員会ホームページ

<https://www.kodomokosodate.jp>

(当財団ホームページからもアクセスできます)



さあ、言おう

2023年3月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

追悼 生涯現役を全う

池田げんえいさん ありがとうございました

清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 挑む！ 我らの地域づくり

地域を思う住民と、住民を思う関係者 相思相愛で広げる助け合い

静岡県藤枝市

11 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

老いも若きも！ 楽しみながら できることで支え合おう

山梨県南アルプス市

20 「地域助け合い基金」 助成先のご紹介／状況のご報告

24 連載 26 老いの暮らしを創る

いいものに触れなさい 福祉ジャーナリスト 村田 幸子

26 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から 7

ソーシャルディスタンス お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

新しいふれあい社会づくりに向けて

● 地域支援事業・

助け合いの地域づくり

30 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

46 ご支援ありがとうございます。

さわかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

47 NEWS&にゅーす

49 活動日記（抄）

㊦寄付のご案内

㊧みんなの広場 / 投稿募集

㊨さわかパートナー・『さあ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと ● 浅野 史郎

追悼

生涯現役を全う

池田げんえいさん ありがとうございます

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

『さあ、言おう』の表紙絵を毎号制作してくれていた貼り絵作家の池田げんえいさんが急逝された。ここしばらくは病氣と共存しながらの体調だったが、少し前に3月号の表紙絵を相談したばかり。まだ76歳、本当に残念でなりません。心からご冥福をお祈りいたします。

いつも、私たちは、〝げんえいさん〟と呼んでいた。財団の創立初期の1992年11月に発行した『さあ、言おう』創刊準備号からおよそ30年、表紙はずっとげんえいさんの作品でお願いしている。時にこちらの無謀な提案にも、「いやあ、そのイメージは難しいなあ」と電話口の向こうで考え込みつつ、「わかりました。やってみましょう。プロですから（笑）」と、明るく穏やかに応えてくれるのが常。新しい作品を創り続け、まさにプロフェッショナルな仕事ぶりで、毎号素晴らしい貼り絵を皆さんに贈り続けてくださった。

亡くなられて改めて、げんえいさんは、人とつながり、人をつなぐ名手だったとしみじみ思う。そのような方に表紙絵をずっと担当していただけたことを誇りにも思う。何人も仲間を紹介してくれて財団の活動を応援してくださり、教えていたデザイン学校の教室に呼んでくれた

ことも度々。若い学生たちが地域活動を少しでも知る機会にと、打ち解けた交流の機会をつくってくれたりもした。それがまた本当にさりげない。突然、休憩時間の教室で声をかける。「とりあえず言ってみるものでしょ」。地域デビューに悩む男性シニアの皆さんにご紹介したい言葉だ。「やってみればいいんですよ。何でも身近なことから。だめでも減るものはないし」と。

さわやか福祉財団は、ご存じのとおり、新しいふれあい社会を標榜して全国に一緒にやろうよと呼びかけているが、発行する冊子の制作に関わってくれている人たちは皆、そんな思いに共感してボランティアに応援してくださっている方々だ。げんえいさんの作品はパンフレットや感謝状等でも無償で使用させてもらい、まさに「できることで応援しますよ」という自然体の社会参加の姿を身をもって示し続けてくれた。

本業の活躍は多方面にわたるが、亡くなられた長谷川和夫さんと共同して制作したのが『だいじょうぶだよーぼくのおばあちゃん』（2018年・ぱーそん書房）の絵本だ。認知症の人が尊厳をもって安心して地域で暮らせるように、子どもにも理解できるようにとの思いで書かれた長谷川さんのやわらかな文章に、げんえいさんの絵がなんとも温かい。

最期は自宅で過ごしていたげんえいさんのベッド脇には、仲間が皆集まってこられていた。在宅の暮らしを心を尽くして支えてくれていた専門職の方は、元々『さあ、言おう』を読んでいたという。何という出会いの妙。

これからは表紙はげんえいさんのこれまでの作品から紹介する予定なので、ぜひ改めて楽しみにしていただけたらと思う。人と人との絆、ふれあいの楽しさと大切さを、げんえいさんと皆さんの思いと共にさらに深く広めていきたい。

広げよう つなげよう 地域助け合い

挑む！
我らの地域づくり



地域を思う住民と、住民を思う関係者 相思相愛で広げる助け合い

静岡県藤枝市

人口約14万3000人、静岡県のほぼ中央にある藤枝市は、「ほどよく都会、ほどよく田舎」とのキャッチフレーズ通り、県庁所在地・静岡市からも電車ですぐ。多くのプロ選手を輩出してきたサッカーのまちとしても知られます。住民主体の生き生きとした活動と、それを支援してきた行政、市社会福祉協議会の取り組みを、市社協所属の第2層生活支援コーディネーター（SC）の塩澤夕子さんに案内してもらいました。

（取材・文／塩瀬 潔泉）

サロンの声から

地区全体が動き出した

あおしま
青島第8助けあいの会 はちすけ

●生活支援活動

「青島第8助けあいの会 はちすけ」は現在、ボランティア会員76名で活動。この日は増田玉貴さん（72歳）が、飯塚敏子さん（76歳）の自宅の庭木の手入れを行った。道路側まで伸びてしまった枝を、飯塚さんの要望を聞きながら手際良く切っていく。



飯塚さん（右）の自宅の庭木を手入れする増田玉貴さん（左）

飯塚さんは、はちすけのコーディネーターでもある。電話で依頼を受けると、利用者宅を訪問して依頼内容を細かく確認する。

「プロでなくボランティアですから、どこまでできるかを利用者さんと話し合う必要もあります。その上で、依頼内容に合うボランティア会員の都合を聞いてコーディネートするのは大変な作業。飯塚さんは午前中には仕事がある中、そこを本当に丁寧にやってくれています」と、はちすけ代表の内藤忠

男さん（77歳）。そして飯塚さんは、あるエピソードを教えてください。

「ある近所のお宅の庭が十年ほど前から荒れ始めて、もともときちんとされていた家だったので私も気にはなっていました。ご主人は耳が聞こえにくく、近隣とコミュニケーションがうまく取れていませんでしたし。そんな中、一昨年に庭木を切ってほしいという依頼がはちすけに入ったので私が話を聞きに行ったところ、実はもうずいぶん前に奥さんが若年性認知症になったと。私が早朝から仕事に行くのを知っていたらしく、はちすけが作業に入った後、ご主人が『あんたも体に気をつけないよ』と私を気遣ってくださいましてね」

今もこの家の庭はきれいに整えられ、草木が小さな芽を出している。

● 安心して、生活を楽しめる地域に

ロコミで利用が広がっているはちすけの活動。立ち上げ当初から昨年10月までの2年間で、活動回数は382回となった。利用会員は1000人で入会し、活動ボランティア1人につき30分250円、ごみ出しは1回50円の有償の活動だ。家の中の掃除や衣類の裾上げ、病院の付き添い、中には、88歳の女性が75歳の利用者に裁縫を教えるといった活動もある。さらに、利用者が旅行中の庭木への水やりや、子育てママさんがちょっと息抜きのために外出する間、子どもを見えるという支援も活動内容としている。

「それが困りごとかといえ、必ずしもそうではないかもしれませんが、でもこの地域で安心して生活を楽しんでほしい、というのも私たちの思いなんです」と内藤さん。

結成のきっかけは、2019年6月に地域の2か所のふれあいサロンから青島第8自治会上がってきた声だ。高齢者が生活の中でさまざまな困りごとを抱えており、助け合いの組織が欲しいというものだった。このとき自治会長だったのが内藤さんで、自治会内に6つある町内会の会長会議にサロンの代表者や民生児童委員などにも来てもらい、意見を出し合った。熱心に地域をまわっている



左から、はちすけの内藤さん、大沼さん、増田克彦さん

民生委員などからは、やはり高齢者の困りごとについての意見が出た。そこで、地区担当SCの塩澤さんがアンケート内容やスケジュール等をサポートしながら11・12月に自治会が住民に調査を行ったところ、約1800世帯から806人が回答。「困りごとや将来への不安がある」が312人、「支援組織が必要」が668人、さらに「今または将来ボランティアに参加してもよい」という回答も570人という結果が出た。

内会役員、子ども会、壮年会などから134名を迎えて発足式開催にこぎつけた。今でも、活動の中で上がってくる課題などを話し合う運営委員会や、会員の交流を図る「はちすけの集い」を開いて、みんなが意見や活動の感想を共有できる運営をしている。

「はちすけを利用されているのは、災害などでも手助けが必要な人たちです。気にかけるべき人がどこにいるかを知れたことは、これからの地域の力になります」と、市議会議員でもあり、はちすけの事務局を一手に引き受ける増田克彦さん（65歳）。はちすけ結成のきっかけとなったサロンを運営する大沼圭子さん（72歳）も、「私の住む町内でもはちすけが浸透してきていますし、私自身、町内のサロン以外に自治会全体でいろいろなことを献身的にやってくださる方がたくさんいると分かって、本当に良かった」と話す。

支え合い出かけっCARサービス

葉梨ささえ愛隊

● 買い物支援

これからの高齢者の足の問題を、市と地域住民で一緒に解決していこうと2018年から取り組みが始まった「出かけっCAR」サービス。この日は、葉梨地区の「葉梨ささえ愛隊」のボランティアドライバー、倉沢邦夫さん（72歳）が、買い物支援用に市社協がリースしている車で濁沢エミ子さん（86歳）を自宅からスーパーまで送迎した。倉沢さんは、トラック運転手として長年勤務。60歳からは幼稚園バスの運転手をしながら、昼間の時間を使ってささえ愛隊の活動に参加している。「子どもたちの顔と名前を覚えて、『○○ちゃん、おはよう』と声をかけるのは認知症予防になりますよ（笑）」

と倉沢さん。ほかに仲間数人と、ボランティアで小学4年生にホタルの飼育を教えているそう。

「家にいたって、テレビを見ているだけでしよう。いろいろやっているおかげで、高血圧でメタボだった現役時代より体重が20キロも減って、健康そのものですよ」と、濁沢さんがゆっくり買い物をする間、楽しそうに話してくれた。

濁沢さんは数年前から週1回、夫と一緒にスーパーで買い物をするためにこのサービスを利用してきた。昨年、



ドライバーは基本的に輪番として
いるささえ愛隊。久しぶりの組み
合わせだというお二人はうれしそ
う（左・濁沢さん、右・倉沢さん）

夫を亡くしてから1人での利用が続いている。

「近くにスーパーがないし運転もできませんから、本当に助かります。この送迎のおかげで生活できています」（濁沢さん）

● 通院送迎も開始間近

住民主体の移動支援「出かけっCARサービス」創設のため、18年に市が立ち上げた「高齢者移動支援研究会」には、市内全10地区の地区社協会長なども参加した。当時、葉梨地区社協会長だった木瀬榮治さんらが、この研究会で高齢者の移動支援の必要性を感じた。木瀬さんは地域福祉のために多方面で活動している人で、呼びかけに地域住民が集まったという。19年10月にはささえ愛隊を立ち上げようと皆で決め、話し合いながら課題を一つ一つ解決していった。

「やはり皆さん、事故のことを一番心配されていたので、手厚い保険に加入していることなどを丁寧にご説明しま

した」と地区担当SCの塩澤さん。現在、地区に4つある自治会の会長や民生委員のほか、手を上げてくれた

住民など20数名がドライバーとして登録。2名のコーディネーターが利用会員から月20件程度の申し出を受けて、

居場所「かいらハウス」

代表 今野有子さん



社会福祉法人で長く障害者福祉に携わってきました。誰でも、生まれて成長して年を取っていく。みんな同じです。その人生に何か寄り添えたらと、空き家になっていた私の実家を使って2015年に居場所を始めました。ネーミングは、「皆良い＝かいらハウス」。最初は全然人が来なくて（笑）、200円のおにぎりランチを出してみたりするうちに人が集まって、地域に根付いてきたように思います。

毎週月～木曜日、ここでお茶を飲み、ご飯を食べながらおしゃべりするうちにお互いの心がほぐれて、悩みや困りごととも話せる仲になります。その中で、居場所の仲間になれることがあれば、ちょっとした電球交換などをお手伝いします。日々の運営も、私にできることは限られていますから、皆さんができることを担ってくださっています。

中学時代にここのこども食堂に来ていた人が社会人になって訪ねてきてくれたり、引きこもっていた人がここへ顔を出すようになって外に出られるようになり、就職されたということもありました。毎日が物語の連続です。

コロナ禍でも、スタッフで話し合ってここは開けていました。「誰も来なくても、私たちの居場所だからね」と。そうしたら、案外皆さん寄ってくださいました。コロナ前は人が集まるイベントなどもやっていましたが、今は安心すこやかセンター（包括）の方に月2回来ていただき、皆さんの血圧測定や健康相談に乗っていただいています。

市から総合事業の通所型サービスBのお話があったときは、ぜひにと引き受けました。高齢の参加者が多いですし、安心して通っていただけたらと思ったからです。

開所して8年目。地域は変化していきますから、その時々ニーズに合った拠点として続けていきたいです。





取材にご協力いただいた渡辺さん（左）と
会計の勝又實さん（右）

ドライバーを割り振っている。

「こういった活動を立ち上げるには、行政や市社協の支援が欠かせません。市の担当課や塩澤さんに、保険のことや白タクにならないためのやり方など、ぜひぶん相談に乗ってもらいました。これから活動を継続していくのは、地区の我々の仕事です」と、地区社協の前会長で葉梨ささえ愛隊代表の渡辺伸一郎さん（72歳）。

葉梨地区では、この春から通院の送

迎も実施しようと準備を進めている。住民にアンケートを取り、通院している人が多かった

いくつかの診療所へ、数人を同時に送迎することから始めてみる予定だ。診療所にも、送迎利用者を続けて診察してもらおうよう依頼するなど、細かな仕組みについて塩澤さんも入って検討を重ねている。

住民の意欲が湧き立つ支援を

市役所、市社協が 住民を全面バックアップ

藤枝市役所で2017年8月から21年3月まで第1層SCを務め、現在は地域交通課で市民の移動問題に取り組む松下武人さんに、生活支援体制整備事業開始当時について聞いた。

「既存の居場所にしても第2層協議体の母体となった地区社協の活動にしても、それは思いがあつてつくられた住民の皆さんのものです。行政側の枠にはめるのではなく、それらを生かして、

活動する皆さんの意欲がもつと湧き立つような支援がしたいと思いました」

過去に障害者福祉を担当し、その人の持つ力を生かす支援の大切さを学んだ、とも話してくれた。

市地域包括ケア課で第1層SCを務める瀧下恵大さんと、同課の斉藤文香さんは今後について、「活動している住民の皆さんはとても楽しそう。ただ、時間の経過とともに人も入れ替わり、思いも変わってくるかもしれません。そういったときに、やらされ感が大きくならないように今後も伴走していきたい」と語る。

市社協所属で塩澤さんと3人で各地区を担当する第2層SCの秋山友紀さ



元第1層SCで事業立ち上げに関わった松下さん



取材にご協力いただいた関係者の皆さん。前列左・斉藤さん、同右・皿池さん。後列左・秋山さん、同中央・瀧下さん、同右・塩澤さん

んと皿池照美さんも、まだ移動支援などの必要性を感じない地区や、関係者のやる気が一般住民まで浸透しづらいといった課題がある中、住民を急かすことなく長い目で見守り、支援している。また塩澤さんは、自分たちよりも地域の人たちが、活動の中で次の困りごとに気づいてくれるのが何よりうれしい、と話す。

「『あの人は、移動に困っているだけ

じゃなくて実はいつも一人であるが、どうしているんだろう』と気にかけてくれたり。そういう情報に、私たちがアンテナを高くして支援していきたいと思っています」

* * *

藤枝市では、生活支援体制整備事業を開始した当初、市社協や地区社協、自治会長、民生委員らと協議の場を持った。そこで大きな課題として上がったのが、高齢者の足の問題

だ。そこで、「高齢者移動支援研究会」を設置。ここには前述のメンバーや包括等に加え、松下さんらの呼びかけで何と市役所の6部局11課室が参集したという。18年に4回ほど開催された研究会では、手法のアイデアなどを住民代表と一緒に検討し、活動のための財源

や運輸支局への確認など、地域包括ケア課だけでカバーできない役割を各部署が担った。市役所が全面バックアップすることで、住民の皆さんも安心して取り組んでくれたのではないかと、松下さんは話していた。

この事業を重要施策と位置付ける北村正平市長は、職員の育成にも大変力を入れている。若手職員にも市長や上層部の話を直接聞く機会を設けているほか、職員のあるべき姿勢を学ぶ研修制度等も創設。そういった取り組みが、「市民のために、目的意識を持って部課の隔てなく働く」という役所内の風土や、市社協など関係者との良好な関係をつくり出していると感じた。組織間の連携は地域づくりに不可欠。住民が自由に楽しく活動するための支援を惜しまない関係者の取り組みは、さらなる活動の広がりにつながっていくに違いない。

広げよう つなげよう 地域助け合い

活動の現場から



老いも若きも！ 楽しみながら できることで支え合おう

山梨県南アルプス市

2003年に6町村が合併して誕生した、山梨県最西端に位置する南アルプス市。国の事業を活用した同市の地域活動創出への取り組みは、当財団情報紙『さあ、やろう』vol.3(2017年10月発行)でもお伝えしました。その後、住民と関係者の取り組みは進み、さまざまな活動が創出されています。今回は、その中から2地区の活動を紹介します。

(取材・文／城石 眞紀子)

地縁の薄い新興住宅地を絆づくりで助け合える地域へ

活動その1

いい友づくり桃の丘盛り上げたい(隊)

住民同士がつながる場づくりで
交流を深めることから開始



南アルプス市白根地区内にある桃の丘団地は、30年ほど前に一戸建て分譲住宅として開発された、いわゆる新興住宅地だ。

約280戸に800人が暮らし、高齢化率は15%。この周辺地域では高齢化率は最も低い、入居から30年が経って子どもは成長独立し、親のみが居住するようになって急速に高齢化が進む。周囲には商店も病院もない環境で、運転免許証返納者や独居高齢者も増え

てきている。そうした中で、有償ボランティアによる生活支援や居場所づくりに取り組み始めたのが、桃の丘地域支えあい協議体^{*}「いい友づくり桃の丘盛り上げたい（隊）」だ。

同協議体が活動を始めたのは6年ほど前のこと。「白根東小学校校区に編成された第2層協議体に参加したのがきっかけです」と話すのは、代表の中川博さん（77歳）。

「当時私は自治会長をしていたのですが、民生委員（当時）の渡邊榮さんから相談を受けて、2人で協議体に参加しました。生活支援体制整備事業といわれても、当初は何をやったらいいのかさっぱり分からなくて、正直、どうしたものかと思っていました。でも勉強会を重ね、さらにはすでに支え合い活動を始めていた八田地区の活動発表を聞いて、私たちにもやれることがあるのではないかとという気持ちになりました。それで、民生委員経験者や自

治会役員経験者などにも声をかけ、有志5人で桃の丘自治会圏域に第3層協議体を立ち上げたんです。自治会と別組織にしたのは、自治会には自治会でやるのがたくさんあるし、まだ何をやるか模索している段階だったので、思いのある少人数で始めてみようと考えたからです」

多くの新興住宅地と同様に、桃の丘団地もそれまで地縁が薄かった。そこで、まずは住民同士がつながる機会をつくろうと、自治会協力の下で17年2月、団地中心部にあるコミュニティセンターにて「いきいき百歳体操」を開始。同年12月には同センター内に、団地住民の交流の場として「ちっくいサロン」もオープンした。

「百歳体操は健康寿命を延ばすことを目的に、毎週火曜日と金曜日の午前10



ちっくいサロン（上）と百歳体操（下）の様子

時から1時間ほど行っています。参加者は毎回10名くらい。一方、ちっくいサロンは毎月第2、第4土曜日の13時30分から15時30分まで開催。サロンを始めるにあたっては何か特徴を出そうと、運営委員が市のバ리스タ教室に通って技術を習得し、本格的なドリップコーヒーを出しています。子どもからお年寄りまで誰でも参加自由で、参加費は1回100円（子どもは無料）。

おしゃべりを楽しむほか、男性は囲碁

や将棋、女性は手芸や絵手紙など、それぞれ好きなことをして過ごしてもらっています。ほかにも、フラワーアレンジメント教室や各種出前講座、さぎ草植え付け講習会など、折々のイベントも実施して、仲間づくりに役立ててもらっています」

＊協議体：国の生活支援体制整備事業に位置付けられている住民同士の話し合いの場。自治体ごとに、全域を対象とする第1層、小学校区や中学校区単位などの第2層、そしてさらに小さい町内会などで第3層を設置している場合もある。

一気に来る高齢化に向けて 生活支援事業に着手

これらの活動に加えて、昨年秋から新たに取り組み始めたのが生活支援事業だ。

「百歳体操やちっくいサロンも定着してきたことから、次の段階として、団地にお住まいの方の実態を掴んで二

ズを把握し、何か新しい活動ができればかと考えました。そこで自治会の協力を得て、一昨年4月に65歳以上の高齢者がいる全戸にアンケート調査をしたところ、コミュニティセンターに集まれるのは比較的元氣な方たちで、家から出られない高齢者もいることが分かりました。また、『日常の困りごとの手助けをする活動があったら利用したいですか?』との設問にも、『利用したい』『将来は利用したい』という方がそれぞれ一定数いたので、そういう方たちには、こちらから出向いて支援する活動もしてみようということになり、生活支援事業に着手することにしたん



カフェ桃の丘入り口（上）と
桃の丘生活支援センター事務所外観（下）



です」

団地内の桃の丘防災センター（旧県住宅公団現地販売所）のキッチン付きの談話室が空き室となっていたため、ここを運営事務所兼常設のサロン（居場所）にしようと計画。当財団の「地域助け合い基金」も活用しながら体制

を整え、昨年10月10日に「桃の丘生活支援センター」を開設した。

「一斉入居したこういう新興住宅地は、一気に高齢化もします。だから、始めるのなら早いほうがいい。そうして今のうちに仕組みをつくっておけば、将来的

にもみんなが安心して暮らせる地域になれるとの思いもありました」

常設のサロンは、『カフエ桃の丘』と名付けた喫茶室。ちつくいサロンが月2回の開催だったため、みんなの憩いの場としていつでも誰でも型の居場所をつくろうと同時開設する予定だったが、ちょうどコロナ第8波の流行時期と重なり、今はオープン待ちの状況だ。

活動は次世代に継承すべき 地域の財産。生きがいづくりにも

生活支援の内容は大きく分けて2つあり、1つは通院や買い物などの移動支援サービス。もう1つは掃除、洗濯、炊事、軽微修繕などの家事支援サービス。謝金は30分300円となっている。「有償にしたのは、無償では心苦しいとか利用を遠慮されるようなことがあるからです。活動を支援してくれるサポーターは現在15名。毎週火

曜日と金曜日に運営委員が

桃の丘生活支

援センターに

常駐し、利用

の申込みを受

け付け。LINE

でつなが

っているサポ

ーターに依頼

内容を流し、

手上げ方式で

マッチングをしています」

利用者はこれまで6名。植木の伐採や、病院や施設への移動支援、見守りなどの活動を行った。

「定期的に見守りをしているのは、障がいのある息子さんと2人暮らしの80代の女性です。お母さんが認知症気味になってきたということで息子さんが心配されて、自分が留守にする間、誰かにそばにいてほしいということで週



マイカーボランティアによる移動支援



運営委員の皆さん。手前右から時計周りに、渡邊さん、中川さん、植田さん、甘利さん

2回支援にうかがっています。実践してみても分かったのは、こういう活動は、信頼関係がないとなかなか家の中までは入っていけないということ。その信頼関係をどう築いていくかが課題です。時間はかかるでしょうが、実績を重ねてまずは基礎をつくる。そうすればいずれ、それが地域の財産になると思っています」

活動を推進する運営委員の皆さんに

も、それぞれの思いを聞いた。

現役引退後に桃の丘団地に引っ越してきたという甘利武彦さんは、「活動に関わる中で知り合いも増え、個人的には日々の生活の張り合いにつながっています」と言い、植田芳喜さんは「これまでの人生でいろいろな人に世話になった恩返しと思ってやっています」。渡邊さんは「生活支援に関してはまだ始めてから数か月ですが、頼りにされるということはうれしいことなのだ」と実感しています」と、それぞれに話してくれた。また中川さんは、「このメンバーが集まってくれたからこそ、ここまで来れたというのが実感」と言い、さらにこう続けた。

「私は趣味がいろいろあるので、退職後遊んで暮らしていました。それはそれで満足していたのですが、この活動を始めて思ったことは、趣味も大事だけれど、自分が地域に役立つことができると人生がより豊かになるというこ

とです。私たちの協議体の名称には、『まずは地域のみんながいい友になって、絆を深めることが大事。それを我々は盛り上げたい』という思いが込められています。思いを同じくする仲間を増やしてこの生活支援事業を浸透させ、次世代につなげていくのがこれからの目標です」

白根地区の協議体活動を支援してきた市社会福祉協議会所属の山本由香里さんも、「桃の丘の皆さんはチームワークも良く、こちらが見習わなければいけないこともたくさんあるいつも思っています。『誰かのために何かをしよう』という気

第1層生活支援コーディネーター 斉藤節子さんの話



桃の丘団地に活動には、それを必要としている人がしっかり見えていることを感じます。アンケートを取るだけでなく、そこから困りごとがある人、活動を担ってくれる人を「盛り上げたい」の方が直接訪問して話をし、活動につなげています。自治会役員さんたちとも丁寧に相談されるなど、多少手間もかかるのかもしれませんが、何より「ここに住むみんなやっていきたい」という気持ちを感じますし、地に足のついた、一步一步段

階を踏んでいく取り組みだと思っています。

中川さんたちが折々に「今、こんなことをやっているよ」と、楽しそうに私たち関係者に連絡を下さるんです。そうすると私たちもうれしくなって、皆さんの集まりに顔を出して、そこでまたいろいろな話ができます。

「桃の丘生活支援センター」開所式では、支援を利用している方が来てお話をされるという「あったかさ」も桃の丘に感じました。今では「活動が生きがいだ」とおっしゃる方もいて、私たちも本当に良かったと思っています。

持ちが強く、でも見返りを求めずに、



山本さん

良い地域にすることが結局は自分たちにとっても、次に続く子世代のためにもなると思うので活動されているところが素晴らしい」とエールを送る。

助け合える地域づくりの実現に向けて、メンバー一丸となつてますます桃の丘を盛り上げていただきたい。

いい友づくり桃の丘盛り上げたい(隊)

桃の丘団地を活動圏域とした第3層協議体。主な活動内容は、ふれあい事業(ちっくいサロン、百歳体操、出前講座など)と生活支援事業(移動支援サービス、家事支援サービスなど)。生活支援事業は有償ボランティアで、謝金は30分300円(移動支援サービスは片道1時間以上は別途1回200円)。利用料金は謝礼として、そのまま援助したサポーターに渡る仕組み。

●連絡先／〒400-0213

山梨県南アルプス市西野1274-98

電話 090-5414-0118

(代表・中川さん携帯)

っている。このうち桃園地区では、やわらかい桃を扱うような優しい気持ちで地域の課題を支援できるように、協議体の愛称を「もものて」と名付けた。その下部組織として活動しているのが、桃園消防団の現役とOBによる生活支援団体「MAGONOTE(まごのて)」だ。

もものての協議体メンバーは地域の課題を把握。少子高齢化に伴い庭木の手入れができなくなつてきて、耕作放棄地も増えてくることが予測された。そうした中で協議体に参加していた消防団OBが、「若者にもできることがあるのでは?」と考えたのが、立ち上げのきっかけだという。

「消防団をやっている仲の良い数名が、東日本大震災発生時に被災地に駆けつけて以来、全国各地で災害支援のボランティアを行ってきました。消防団と

現役とOB消防団員が生活支援。地域の中で気持ちいい汗をかく!

活動その2

MAGONOTE

災害時や防災活動以外にも地域のために何かしたい

くしがたまた
櫛形北地区では、2018年6月に

くるわだ、桃園、上宮地かみやじの3地区が一緒になって第2層協議体を立ち上げた。現在は3地区それぞれの活動が明確となり、第3層ごとに話し合いの場を持



いうのは地域住民の安心と安全を守るのが役割ですが、そのボランティア経験から、災害時や日頃の防災活動以外にも地域のために何かできないだろうかと思っていたんですね。同時に、私自身が消防団退団時期を迎え、せっかく地域のために尽力してきた仲間ともこれで付き合いがなくなってしまうの

はもったいないし、寂しいとも感じていました。そんなときに、協議体で話し合われた地域課題のことを聞いて、だったら、有志で困っている人の生活支援をやってみないかと提案したんです」

こう話すのは、消防団OBで市社会福祉協議会所属の第2層生活支援コー

ディネーターでもある小

林陽一さん（43歳）。

こうして、現役もOBも関係なく参加したい人たちが仲間として集まり、

MAGONOTEの皆さん
(上)
「MAGONOTE」のステッカーが貼られた消防団の車両（左）



3年ほど前に10名でMAGONOTEを結成。

「活動を始めるにあたっては、地域づくりをしている協議体を通し

たほうがスムーズにいくだろうし、そのことをももてに伝えたところ、『活動部隊としてやってもらえたらありがたい』と言ってもらえまして。それで、協議体経由で困りごとに対応することになりました」

**活動日時は日曜日の午前中。
力仕事もお手のもの！**

現在、構成メンバーは13名。年齢は20代から40代で、全員が会社員や団体職員などのサラリーマン。平日は仕事があるため、活動日は日曜日の午前中のみと決め、「庭木が伸びてしまった」「草取りができない」「粗大ゴミが出せない」などの困りごとに応えている。

「メンバーはLINEでつながっていて、依頼が入ったら日時と場所を伝えて、出欠を確認。基本的には無償でやらせてもらっていますが、どうしても謝礼を払いたいという方には、支援者

1人に対して1時間500円をいただいて、それを活動費に充当。また、もものてからも活動資金をバックアップしてもらっています」

メンバーらは、チェーンソーを使つた木の伐採などの力仕事もお得意で、大体の人が脚立や軽トラックなども保有。しかも、日頃から消防団活動に携わっているため統制もとれていて、普



活動の様子

通なら丸1日かかるような作業でも、2時間程度であつたという間に終わらせてしまうというから頼もしい。

当初は地域に住む65歳以上の高齢者夫婦世帯、独居高齢者、障がい者世帯を対象としていたが、最近では「困っている人がいれば、誰でも関係なく活動する」ことにしているそう。また、櫛形北地区内のほかの第3層協議体からも呼ばれば手伝いに行き、一緒に活動しているそうだ。

活動は大人の福祉教育の場。 楽しいから続けていける

それにしても、仕事も家庭もある働きざかりの年代。活動は負担にならないのだろうか。

「日曜日の朝2時間ぐらいなので、負担には感じていません。私の中では地域のためというよりも、自己満足（笑）。気持ちのいい汗をかいて、みんなでやりきった！終わってきれいに

なった！というところに充実感を得ています」というのは、消防団部長の小林大さん^{だい}。消防団9年目の加藤壽也さん^{としや}は「作業が終わった後に飲む缶コーヒーのおいしさは格別。仲間とワイワイ活動できるのが楽しい」、消防団3年目の中込大貴さん^{たいき}は「依頼者からは喜んでもらえるし、なかなか会う機会がなかったOBの方ともつながりが増えた」と話すなど、皆さんまったく気が負いがいい。

そして、小林陽一さんは活動に対する思いを次のように語ってくれた。

「現地に集まって、誰の家かとあまり詮索もせず作業をして、終わったねと解散する。そういう気軽さもいいんじゃないですかね。若い人たちはみんな忙しいから、『協議体に入って地域づくりをしてください』と言われても、正直難しいと思うんです。でも、自分たちがやりたいことをやって、それで目の前の人『ありがとう』『助かつ

た』と言ってくれる。ああ、地域にはいろんな事情で困っている人がいるのだと、肌で感じることもできます。それは図らずも、協議体に入らなくても協議体の方々と同じ意識で活動できているということ、若いうちにそうした経験を積んでおけば、いずれ自分が地域に貢献しようと思うかもしれない。活動は他人事から自分事、つながりの大切さなどを学ぶ、大人の福祉教育の場々にもなっているように感じています」

協議体事務局を務める市社協職員の飯田勝也さんによれば、「活動時にももとの協議体メンバーが訪れて、一緒に草取りをするなどの交流も少しずつ生まれています。上宮地では協議体メンバーと一緒に活動を実施したことで、『若い人たちが頑張っているのだから、自分たちの地区でもやらなきゃね』と生活支援の仕組みが生まれたり、

曲輪田でも『こういう活動って大事だよね』と生活支援について考えるきっかけになるなど、活動創出の起爆剤ともなっています」とのこと。

若い世代の地域離れが指摘されて久しいが、楽しく、そして自分たちのペースで活動できる場があれば参加意欲も向上。それによって地域全体が活性化して将来の担い手づくりにもつながる——。そんな明るい未来が垣間見られ、元氣と勇氣をもらったように思う。



取材を受けてくださった皆さん。左から中込さん、加藤さん、小林大さん、飯田さん、小林陽一さん

MAGONOTE

桃園消防団の現役・OBによって結成された生活支援団体。桃園地区を活動圏域とする第3層協議体「ももて」の下部組織として、協議体から上がってきた地域の困りごとを助け合いの精神で支援。主な活動内容は、庭木の伐採、草刈り、除草剤まき、粗大ゴミの撤去など。利用料金は基本無料。日曜日の午前中に活動を行っている。

●連絡先／〒400-0332 山梨県南アルプス市鏡中條1642-2

電話 055-283-4121 (事務局・南アルプス市社会福祉協議会 担当／飯田さん)

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りごと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、高齢者の移動支援から広げるつながり、地域のバラスポーツ教室、竹のランブシェード制作を通じた活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

岩手県盛岡市

高齢者の送迎に地域おこし協力隊も参加 若年層にも輪を広げた交流を目指す

おおがゆう
大ヶ生カンパニー（仮称）

助成金額 15万円

大ヶ生カンパニーは、2021年から地域の魅力を発信し関係人口の増加を促進するために、里山体験やアグリツーリズム事業等を展開。事業の先生となる地域住民へのポ

ランティア活動として、年金支給日や受診日に公共交通空白地帯の買い物・移動支援（お出かけツアー）を実施しています。

体験事業を移動支援の財源としていましたが、コロナ禍で事業の縮小を余儀なくされたため、本基金の助成に応募されました。助成金は、車検費用とガソリン代に活用していただきました。

毎週1回、予約した家をまわり、乗り合わせて目的地へ送迎。車の中はいつもおしゃべりに花が咲き、地域おこし協力隊の方にも活動を手伝ってもらうことで、地域の人や

歴史、文化の情報収集等にも役立ててもらっているそうです。

「この活動のおかげで生活できている」と感謝の言葉をもらい、「こちらで癒しの時間をいただいて感謝しています」とのこと。

今後は、若年層の学校・部活・塾帰りのバスがない時間帯にも活動を広げ、地域の学生や子どもたちにボランティアとして高齢者の介助を担ってもらうなど、地域内の人の顔を知る機会を増やしたいと考えているそうです。人口が減少している中、

中山間地域で暮らす人がいかに大事な役割を果たしているか再認識し、地域に誇りを持って活動を継続していきます、と意気込みを寄せてくださいました。



お出かけツアー時の車内

福島県鏡石町

パラスポーツの交流で みんなが支え合う地域を目指す

TEAMまきばの朝

助成金額 15万円

TEAMまきばの朝は、障がいの有無、高齢者等を問わず誰もがスポーツを楽しめる場として、毎月2回パラスポーツ教室を開催しています。コロナ禍で外出を控えることが多く、人と触れ合う機会が少なくなった障がい者にとってこの活動は、ストレス発散や肥満予防、運動不足解消など、心身の健康維持になり、地域住民と交流することで社会性を養う機会でもあります。また、パラスポーツを通して障がい者が外に出て体を動かす場を地域が支え、一緒に楽しむことにより障がいを理解し、どんなことに困っているのかを話せる場にもなっているといえます。

本基金の助成金は、スカットボールセット2セット購入に活用していただきました。

チームをつくって活動することにより交流が深まり、地域住民にも障がいを理解してもらったきっかけになりました。また、地域にどんな障がいのある人がいるのか知ってもら

うことで、困ったときに支え合える地域を目指しているということです。障がいや高齢を理由に地域活動に参加できないのではなく、誰でもできるパラスポーツと一緒にやることで、地域みんなで支え合いたい、とのことです。



パラスポーツ教室の様子

大阪府岸和田市

竹害の課題を ワークショップによる交流で解決したい

Nut's Work's

助成金額 15万円

20〜40代の働き盛りの職人やアーティストらが、本職で培ったスキルを生かして地域を盛り上げようと、ものづく

りを通じて循環する社会を目指しているNut's Work's。竹害に悩んでいる地域の放置竹林を整備し、その竹を使用してランプシェードを制作するワークショップを中心に活動しています。老若男女問わず誰もが楽しめる簡単さと明かりの持つ力により、多くの人々が社会問題とつながりを持ち、自分たちのまちを自分たちの力で彩るという共通の目標を持って楽しんでもらおうと取り組んでいるそうです。

SDGsによる課題解決の方法として

も内容が伝わりやすいので、地域の小学校やさまざまな団体において、ワークショップを行いました。伝統ある「だんじり祭り」と連携することにより多くの人々の協力を得て、コロナ禍で希薄になりつつあった人の温



小学校でのワークショップの様子

「地域助け合い基金」 状況のご報告

もりもあらためて感じたとのこと。今後は、出前授業を通じて支援学級の子どもたちとランプシェードを制作するなど、地域課題の解決に参加するカリキュラムとして定着

させることも目標だそうです。活動に参加する人みんなが主役となるようなキラキラした夢のあるプロジェクトを進めていきたい」ということです。

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。

2月15日までの状況をご報告いたします。

(2月15日 当財団ホームページ開示時点)

◎寄付受付額

215件

3156万8836円

このほかに当財団より1億2000万円を供出

◎助成実行額

868件

1億3869万9064円

地域助け合い基金は、地域共生社会の実現を目指し、助け合い活動のスタート・継続を支援しています。引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願ひ申し上げます。

(事務局長・内田)

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、QRコードもご利用ください！

基金に関するご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

老いの暮らしを創る

いいものに触れなさい

福祉ジャーナリスト

村田 幸子

「3月にザルツブルクのイースター（復活祭）音楽祭へ行きませんか。

4夜連続のチケットが手に入ります」

と誘われ、即座に「行きます」と、私。15年も前のことです。即答したものの後日、具体的案内が来て腰を抜かしました。普通の海外旅行の4回分位にはなるだろうと思われる代金。加えてドレスコードがありました。男性はタキシードかダークスーツ。女性はそれに準じる服装というのです。「一体どんな格好をしたらいいの」と、同行する3人の友人共々、頭を抱えてしまいました。揃って「止めようか」という雰囲気になったのですが、それも一瞬のこと。「こんな経験は二度

と出来ないと思うから、私は行きたい」と強く主張した友人の一言で、皆行く決心が固まりました。

さあ、それから。イブニングドレスなんて持っていないし、着物にすれば荷物が増えるしと、あれやこれや悩んだ結果、一生に一度の機会だから思い切ってドレスを買いおうということになりました。勢いとは恐ろしいもので、「一生に一度だから」という言葉に後押しされ、気分はどんどん高まり気持ちに歯止めがかからなくなりました。3人がチグハグにならないようにと基本的なレベル合わせをし、二人の友人はグリーンとワインレッド、私はベージュとオレンジが混じったドレスをそれ





ぞれ調達。「もう準備した?」「アクセサリはどうする?」等のメールが行き交った準備段階は、もうそれだけで十分に旅の楽しさがありました。

イースターの音楽祭は1967年、ヘルベルト・フォン・カラヤンが創立したもので、キリストの復活記念祭に行われます。音楽祭当日の座席は最前列。舞台に向けた首が痛くなりましたが、指揮者のサイモン・ラトルさんの姿は、まるでテレビのアップのように間近でみることが出来ました。サーの称号をもつラトルさんは、厳めしさというより体全体から明るい雰囲気、表情豊か。男の色気というものが感じられ、音楽会終了後はベルリンフィルの演奏そっちのけで、ラトルさんがいかに魅力的であったかという話に終始しました。

二度と経験することがないだろう贅沢な旅。熱烈なクラシックファンでもない私が「行こ

う」と決めたのは、社会人に成り立ての頃尊敬する先輩から「何でもいからできるだけいいものに触れておきなさい。今はわからないかもしれないけど、いずれ必ず君の身になるから」と言われ、今もそれが深く心に残っており、機会を捉えてはいいものに触れるよう心がけてきたのです。チンパンカンパンの時もあれば自分でも背伸びしているなと感じる時も、また「ああ、いいものに会ったな」と実感できることもありました。

「いいものに触れておきなさい」ということは、本物を見続けることで目が肥えてくる。それまで見えなかったことが見えてきますよということだと、次第にわかるようになります。良し悪しが判断できるということは、暮らしの上での心棒となります。3月は多くの人が実社会に出ていきます。生涯にわたって心棒となるような言葉に、どれほどの人が出会えるでしょうか。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

人生 | ジェンダーの
視点から
100年時代を
生き抜く知恵 7

ソーシャルデイスタンス

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子



(そでい たかこ)

お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニケーションネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族 変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路 男の末路』（中央法規）、など多数。



キスしたりハグしたりする習慣のない日本では、もともと人と人との距離がそれほど近くはなかった。コロナ禍は、その距離をいっそう拡大させたようだ。感染拡大を防ぐために、密閉、密集、密接の三密を避け、人と人との間には2メートル以上の距離をおくことが奨励されている。

学校給食やレストランでは黙食が求められ、人が集まるところには必ず、「会話はお控えください」の張り紙がみられるようになった。私を利用してしているスポーツクラブのプールには、「黙泳」

との注意書きがある。泳ぎながら喋るのは不可能だが、コロナ禍以前には、プールの端で会話に没頭する人が、とくに中高年女性では多かった。

人と人との間に一定の距離をおくソーシャルデイスタンスが勧められた結果、もつとも被害を受けたのは高齢者ではなからうか。病院や高齢者施設では家族や友人との面会が禁止され、2年以上もの間、まったく面会が許されない施設もある。コロナ禍の初期には、病院における面会は厳しく制限され、最期を看取ることができなかったばか

りでなく、火葬場への同行も断られることもあった。

持病をもち、免疫力の低下した高齢者が暮らす施設では、頻繁に集団感染が発生しているのだから、面会が禁止されるのもやむを得ない。ガラス越しあるいはスマホやタブレットを使って面会するというケースもあるが、身近に声を聞き、体に触れるのであれば、本当に会ったという気がしないだろう。

入院や入所の高齢者だけでなく、在宅の高齢者でも外出や人と会う機会が減ったために、体力気が低下し、認知症が進んだ者もいる。

私には、時々会ってランチを共にする大学時代の友人がいるが、新型コロナウイルスの感染拡大が始まって1年半ばかりの間に、私を含めて4人中3人が転倒し大腿骨折してしまった。感染を恐れて外出を控え、家に閉じこもった結果、運動量が減って筋力が低下したことが、その原因ではなからうか。

一般に、健康を維持するには、栄養バランスのとれた食事をし、継続的に運動をすることと考えられているが、それよりも社会的に孤立しているほうが、認知症や要介護になりやすい。

多数の高齢者を対象に調査を重ねてきた日本老年学的評価研究によると、多様な組織に参加している人ほど、要介護発生のリスクが低く、週に1回以上運動をしている人でも、一人でするよりもグループでする人のほうが要介護と認定される確率が低い（近藤克則『長生きできる町』角川新書、2018年）。

つまり、一人黙々とジョギングやウォーキングしたり、ストレッチやヨガに励むのでは、必ずしも健康寿命の延伸にはつながらないのである。

人との交流によって、脳が刺激され、新しい情報を得ることで日々の生活がより充実したものになる。コロナ禍が生み出したソーシャルディスタンスが、一日も早く解消されることを心から願っている。

みんなで 誰もが安心して暮らせる 地域共生社会をつくりましょう

さわやか福祉財団は、皆様のご支援によって活動しています。

さわやかパートナー（賛助会員）として、
ご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。



個人会員、企業・団体等の法人会員ともに、どなたでもお申し込みいただけます。

税制優遇措置もあります。詳しくは、54ページをご参照ください。

◎1回ごとに金額を自由にお決めいただく一般ご寄付も、随時受け付けております。

■ ご寄付全般に関するお問い合わせ ■

電話 (03) 5470-7751

メール mail@sawayakazaidan.or.jp

新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

● 地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・

ご寄付者の皆様のご紹介

NEWS & にゅーす

さわやか活動日記(抄)





地域支援事業・

各地の動き

(2023年1月1日～1月31日)

●全国各地で、

推進の支援をしています

●活動の一部を紹介しています

SC生活支援コーディネーター

住民に参加を呼びかける支援

(住民対象のフォーラムや勉強会の支援等)

板橋区(東京都)

17日/板橋区は、55万人の都市部大規模自治体でありながら、行政と社協の強固な連携体制の中、住民主体の活動を継続して実践している。この日、区民に広く知ってもらおう機会として、区

立文化会館大ホールにおいて「地域づくりセミナー」が開催された。当財団は、生活支援体制整備事業の考え方や、全国の事例を情報提供した。全18圏域の第2層協議体からは、それぞれの活動について構成員の想いの込められた報告があり、会場から拍手が湧いた。地域の助け合いの重要性を確認することができた。今後の活動創出に向けた発展に、大いに期待がかかる。(長瀬)

南アルプス市(山梨県)

15日/南アルプス市主催の

「支えあいの地域づくり実感フォーラム」みんなで一緒につくる支えあいのまち」が開催され、当財団も協力。市民など約150名が参加した。市社会福祉協議会会長、市長、第1層協議体によるフォーラム実行委員会の委員長らのあいさつの後、第1部として財団の鶴山が「協議体で変わる私たちの未来」として



南アルプス市フォーラムでのリレートークの様子(1月15日)

講演した。協議体を立ち上げて7年。第2層16圏域に加えて、自然発生的に第3層51圏域で協議体が立ち上がり住民参加による地域づくりが広がっているが、一番の悩みは後継者問題。その課題も含め、助け合いを広げるヒントとなる考え方や手法、意識したい仕掛け等について全国の事例を入れて紹介。「今後の地域共生社会を実現するには、住民主体の地域づくりを推進する協議体が地域の宝になる」とメッセージを伝えた。

第2部は、行政担当の河野慎治氏、第1層SCの斉藤節子氏、第2層SCの小林陽一氏がそれぞれ報告。続いて「協議体に参加して支えあいの地域づくりと私」と題して、

斉藤氏と小林氏の進行で、第2層・第3層協議体メンバーが取り組んでいて楽しいことや気づきなどを紹介。「住民の生の声は心に刺さる」と財団がコメントし、リレートークを行った。最後に、第2層協議体の16名の代表者の今後に向けたメッセージを収録した動画を全員で共有した。協議体の楽しさや、さらに助け合いを広げていきたいという思いが会場に伝わり、感動的で意欲あふれるフォーラムとなった。

同市は毎年テーマを変えてフォーラムを実施しており、金丸一元市長はじめ行政職員も参加して、市全体での取り組みを大切にしながら推進していることが住民にも伝わっているのではないか。アンケートでは「自分が高齢になったときどうするか、地域包括ケアシステムの姿を知ることができて安心した。今やっていることが大切だと思った」「他地域での活動も分かり、新たな可能性を感じました」「市内でもこんなに素晴らしい人、活動がされ

ているところに感心させられました」「皆さん楽しんで活動していることが素晴らしい」「MAGNOTE(16ページ／参照)の方々の若さに期待できます!」「誰かのために活動が始まり、最後は自分のためになる好循環の地域づくりに魅力を感じた」など前向きな意見がたくさん出された。新たな理解者を増やし、市全体で住民主体の地域づくりが進んでいくことを実感した。

(鶴山、沼上)

阪南市(大阪府)

16日／阪南市の「まちなかサロン・カフェフォーラム連絡会」には、同市内の約40か所のまちなかサロン・カフェフォーラムの活動者が登録されている。例年行っている「まちなかサロン・カフェフォーラム」では先駆的な取り組みの紹介や活動者同士の情報交換を行ってきたが、コロナ禍で今回3年ぶりに開催された。活動者が集まる機会に、居場所が持つ役割や、枠にとらわれな

が目的。

第一部で当財団・目崎から、居場所の必要性や機能、居場所運営継続のコツやポイントなどについて、群馬県高崎市や静岡県袋井市の事例を紹介。地域のみんなでつながること、いつでも誰でも行ける居場所、子どもが真ん中で世代を越えてつながる居場所について話し、財団の「ともあそび」冊子を紹介した。

第二部では、本誌2020年7月号にも掲載した同市内「箱の浦自治会まちづくり協議会」の岡保正会長から立ち上げの過程で大変だったこと、活動で大切になっていること、協力者や関係機関とのネットワークづくり、多様な居場所が紹介された。「でる」「しゃべる」「たべる」を合言葉に10年から活動を始めた同協議会は、朝市やサロン、お助け隊、子どもの企画を実施してきた。「高齢者が自立できるお助け」をコンセプトに、元気な高齢者が要支援の高齢者を支える。会長だけで判断

せず、みんなで意見を出し合って決定することなどが紹介された。

第二部の意見交換は5～6人のグループごとに行われ、助成金や寄付、空き家、男性スタッフの活躍などが話題に上がった。参加者からは、カフェやいきいき百歳体操の取り組みを始めたことや、日曜日だけでもカフェを行いたいといった意見・感想が出た。また、財団から、活動を継続することや新たな仲間を巻き込むことで活動を広げていこう、と伝えた。（篠原、目崎）



阪南市「まちなかサロン・カフェフォーラム連絡会」の様子（1月16日）

箕面市（大阪府）

14日／箕面市社会福祉協議会主催「第3回地域共生社会シンポジウム」が開催され、当財団も概要説明等で協力。

地区福祉会、民生委員、青少年指導員、PTA、こども会、社協、ボランティア、NPO、自治会等の333人が参加した。「『子ども食堂』の活動から見えるもの」をテーマとし、同市の子ども施策と子どもを取り巻く現状について共有し、地域の支えが必要な子どもがいることを知り、活動者らの今後のモチベーションにつなげること。また、市内の子ども食堂実践報告を共有して地域全体で子どもたちを育てる意識を高め、住民や団体が取り組める子ども支援について考える機会とした。

3件の実践報告では、多様な団体が連携して子ども食堂を実施することで、シニア世代と子育て世代の間のギャップが縮まったこと、共働き世帯の子育てを応援しようと子ども食堂を実践したところ一定数の、気になる子の居

場所となっていること、同市に貧困の子どもがいないとの周囲の認識から子ども食堂スタートに踏み出せずにいたが、NPOや社協からの働きかけでスタートできたことなどが報告された。

また、「箕面市の子ども政策と子どもを取り巻く現状」として、市教育委員会と小学校教員からそれぞれ、学校に行くのがしんどい子が増加しており、「ここにいってもいいよ」という居場所の必要性等について報告が行われた。

最後に

財団・目崎が、子ども真ん中の居場所の必要性、子ども、子の共感力を育てること。また、子ども食堂



箕面市「地域共生社会シンポジウム」の様子（1月14日）

は誰もが関われる居場所であり利用者も参加者もボランティアもそれぞれに役割があること。今あるカフェや居場所に気軽に行ってみることから始めよう、みんなで支え合うまちづくりを進めていこう、とまとめた。参加者からは、実践報告の活動に共感する意見や、活動に参加してみたいという声が聞かれた。

(篠原、目崎)

倉敷市(岡山県)

28日／「倉敷市支え合いのまちづくり 児島地区フォーラム」が倉敷ファッションセンターで開催された。同市では、住民と共に考える場として地区別にフォーラムを開催してきており、今年度の児島地区では住民ニーズの高い「人と地域をつなぐ移動支援」地域でくらしの足を考える」をテーマとしている。最初に導入として当財団から移動支援について解説。続いて「ぐるっとこない」「しおかげGoGoシヨッピング」の2団体からの実践発表を受け、「欲しいと思う地域の足に対して

自分たちでできることを考える」というテーマでグループワークを行った。定員60名以上の参加者で9グループでのワークとなったが、どのグループも活発に意見が出ており、前向きな内容発表が会場で共有された。ここで芽生えた住民のヤル気は、児島地区担当のSC(社協)と地域包括支援センターがしっかりとフォローアップしていく予定となっている。

(高橋)

SC研修・情報交換会等に協力

北海道

30日／北海道社会福祉協議会主催・さわやか福祉財団共催の「令和4年度生活支援コーディネーター連絡会議」が、現地とオンラインのハイブリッドで開催された。参加者95名。さわやかインストラクターの澤出桃姫子氏、本田徹氏、丸藤競氏、山本純子氏と当財団がグループワークのファシリテーターとして協力した。

行政説明に続き、9グループに分か

れて意見交換。事前に参加者に対して、「特に課題に感じている点とその具体的内容」「重点的に取り組み、成果が出ている点とその具体的内容」についてアンケートを実施。その項目に合わせてグループ分けを行った。

コロナ禍での取り組みについて意見交換した中では、行政から活動自粛を求められたところはほとんどなく、通いの場なども感染症対策を十分心がけることで開催できたところが多かった。参加者からは、「絶やさず取り組むことに注力し、活動場所の面積や導線確保を一つ一つ検証し、『ふまねっと運動』を開催した。会場に來なくなった人には2週間に1回、介護予防通信を配達し、第2層SCが電話をかけて状況を把握するなどした」「高齢者がオンラインを使用できるようにレクチャールし、zoomを活用した通いの場を開催した」「コロナ禍での活動の工夫を紙にまとめて配布した」「コロナ禍でボランティアがどんどん減っている

たため、2021年度からボランティアアスクールを年3回開催したところ、徐々にボランティアが増えていった。ただ、施設で住民が行うボランティア活動が中心なので、生活支援のボランティアにも住民が興味を持ってくれるようにこれから取り組んでいきたい」という意見が出た。

また、食事を提供しないようにしているサロンなどがあり、どのようにして地域食堂等を実施しているのかという問いに対しては、同じグループの参加者からお弁当配達に切り替えたという話があった。その他、「自分は高校生のとき、地域の通いの場の手伝いをしていた、今は活動を創出する立場のSCになっている」という参加者の話から、子どものときからボランティア活動に参加することが大切だということに話が及んだ。

網走市では小学生がボランティア活動に参加しているが、「もともとボランティア活動に興味はあったが、どの

ようにすればボランティア活動に参加できるのか知らなかった」とのこと。気持ちはあるけれど活動開始のきっかけを見つけられずにいる人が潜在的に多いのでは、という話になった。

協議体の運営については、テーマを決めて集まるよりも、自由に話して皆でテーマをつくり上げていくことが大切ではないかとの意見も出た。

参加者の多くはSCだったが、「今後就任予定の方も参加対象」としたことから、行政職員やSCではない包括職員も参加していた。また、今回から「社協のSC」という条件をなくしたこと、今まで参加できなかったSCも参加しており、とても意義深いものになった。今後も継続的に協力していきたい。

山梨県

30日／山梨県主催の県内SC向け研修会（応用編）が行われ、当財団も協力市町村から約30名が参加した。

財団・鶴山から、「住民主体の助け

合い地域づくりをどのように進めていくのか」と題して講演。動けば動くほど課題にぶつかるが、それを皆でどう乗り越え助け合いを地域に広げていくのか、SCや協議体が住民に働きかけている例、庁内連携を進める例など、多様な事例をヒントとして紹介した。

続いて、事例報告として2つの市町から取り組みのプロセスについて報告があった。笛吹市の第1層SC佐々木清美氏からは、「笛吹市・支え合う地域づくり会議（第1層協議体）の経過」と題して第1層協議体の動きや、市としてどのように動いているのか発表があった。第2層SC長田佐和子氏からは、「協議体活動を通じた住民主体の地域づくりへ」と題して、第2層協議体の動きについて発表があった。

富士川町の行政担当である笠井美紀氏は町の概要について報告。共に取り組んでいる第1層SC井上宏樹氏からは、コロナ禍で挫折しそうになったがフォーラム実行委員会を立ち上げ、そ

の後の勉強会で前向きな住民の参加がありうれしかった、じっくり時間をかけて取り組んでいきたいとの報告があった。

グループワークは、テーマ1「住民主体の助け合い活動を広めるために困っていること」―①助け合いの体制づくり、②ニーズ把握や担い手の掘り起こし、③助け合い活動の創出。テーマ2「関係者と生活支援コーディネーターの連携」―①「課題」となっていること、②「工夫」していること、について意見を出し合い、発表でさまざまな課題や手法を共有した。

「住民の本当のニーズを拾えているか。アンケート調査をしても言いにくい人もあるので、困ったら言ってもいいんだよという文化をつくっていくことも大切。困りごとだけでなく、できることや好きなことも聞き、その活動もつなげて困りごとを拾いやすい関係を目指している」等の意見もあった。

参加者の経験年数はさまざまだが、

各グループでリーダーシップを発揮し進行するSCや行政職員の姿も見られた。それぞれが悩みを出し合い、情報交換する中で多様な情報を得てモチベーションをアップして、地域の取り組みに生かせる良い機会になったと思う。

(鶴山、沼上)

静岡県

26日／静岡県で、今年度第2回SC情報交換会が開催され42名が参加。当財団も協力した。実践報告は同県伊東市、袋井市、長泉町、磐田市。SCが取り組みを発表した。

グループワークは「実践者を囲んで深掘りしよう」「本音で語ろう」の2つのテーマを設定。それぞれ希望するテーマに分かれて、1グループ5〜6人程度で実施した。ファシリテーターとして、財団の助け合い推進パートナーや実践報告者が参加した。

現役勤労者にどう助け合い活動に関わってもらうかが課題となっている自治体もあるとのこと、財団から最後

に、現役勤労者の生活支援ボランティア活動参加のパンフレット（SC向け・財団制作）を参加者全員に配布し説明した。

福井県

24日／福井県では、昨年11月に「生活支援コーディネーター養成全体研修」を行った。この情報交換会は、全体研修以降に各地で実践したときの課題や、今後の展開方法等について意見交換してヒント

(澤)



福井県の情報交換会の様子（1月24日）

をつかむために実施されている。できるだけ地域状況を合わせ、少人数で話しやすい場とするため県内2圏域

でそれぞれ開催することとしており、今回は福井市内の福井県立図書館で実施した。第1層・第2層SCと行政担当者で30名ほどが参加しており、グループワークの内容共有だけでなく、SCと行政に行った事前アンケートを参考に各地の実践報告や課題報告等もしてもらい、意見交換をした。(高橋)

京都府

19日／京都府の生活支援体制整備推進のための情報交換会がオンラインで開催され、70名ほどが参加。当財団も協力した。

財団・目崎からは「生活支援体制整備事業の基礎 助け合い活動の創出」として講義を行った。前半は「何のための生活支援体制整備事業なのか」「協議体やSCとは何なのか」、基礎の部分の振り返りを中心に、住民主体の多様な助け合い活動の創出とネットワークづくりがカギとなること、地域における「取り組みやすい課題」を見つけ、解決に向けてできることから取り

組みを考えること、そしてその活動の協力者を探すこと、SCは協議体と共にチームワークで活動することを紹介した。後半の事例紹介では、小さなエリアの意見交換から協議体を発足させたプロセスの紹介。高齢者のニーズを包括からも情報提供してもらう。住民の生の声を聞くために地域に足を運びニーズを把握すること。まずは地域で人を集め、担い手の養成を行い、声かけや見守り活動・居場所づくりにつながった事例。住民も包括も行政も一緒に立ち上げから関わっていくことなど、協議体をつくり活動創出に至るまでのポイントを紹介した。

同府内のSCからは、活動のプロセスを中心に報告が行われ、住民の声を聞いて、皆で目標を共有しながら話し合いを進め、活動をつくってきたことなどが話された。京都市南区の買い物支援の取り組み「買援隊」は、自治会長が普段から抱えている課題を解決し

たいという思いがきっかけで活動がスタートし、児童委員やまちづくりアドバイザーなどと実務者会議(協議体)を4回行い、買い物が困難な住民の声を吸い上げ、意見交換を行った。今では買い物支援の取り組みが見守りや地域住民のコミュニケーションの場となっている。課題に気づき、プロセスを共有することやネットワークづくりが大切であると報告された。

宇治市の「伊勢田ふれあいプロジェクト」はPTA会長が立ち上げ、体育振興会など既存の団体を活用して、ラジオ体操後の登校の見守りや学習支援につながっている。北横ODEN(第2層協議体)は、行政と連携した買い物支援「とくし丸」や、誰でも利用できる「グリーンカフェ」を創出している。みんなの笑顔を目標に既存の団体が他団体を支え合うネットワークづくり、住民と一緒に目的を共有することや、地道に住民の話を聞きながら活動を継続してきたプロセスが紹介さ

れた。

グループワーク①は、講義や事例報告を聞いて自分の地区で参考にしたことや自分で取り組みそうなことを中心に話し合われた。過疎が進み外出しづらく、一部の限られた人だけが活動していることや担い手がないこと、SCの認知度が低く住民への理解が進まないことなど課題が上がったが、まずは住民の話し合いの場に参加したり、民生委員や福祉員と連携しながら地域の取り組みに参加したなど、前向きな意見があった。

グループワーク②は、協議体での話し合いが活性化するための取り組みや工夫について話し合われた。買い物ツアールでフレイル予防や見守りにつなげている取り組みや、買い物だけでなくみんなと一緒に出かけて楽しく話す時間を目的にしている人も多いこと、地域の活動を広報するためにコミュニティリーダーバイザーから助言をもらいSNSやYouTubeを活用してサロン

の活動を発信していること、地域の課題を把握するためにサロンのリーダーにヒアリングを行ったり、民生委員の交流会に参加したりしているといった内容がグループ内で共有された。

グループワークの発表では、「協議体の会議に参加者がいなくてもあきらめずに地域への声かけを継続していきたい」「これまでの協議体は硬いイメージがあったが、誰もが参加できるようにリニユアルして、出張型の話し合う場や、ゆるやかな話し合いの場を設定したい」「住民の気持ちに火がついていない地域を盛り上げたり、関係を築くために地道な活動を継続したりしたい」など充実した話し合いの成果が見られた。まとめて財団から、講義や事例、グループワークの内容を自分の地域に置き換えることや隣の地区の取り組みを見に行くこと、活動を創出するためのプロセスが重要であることを話した。

来年度は、年2回の研修（新人研修

と全体研修）と保健所圏域での情報交換会を適切な時期に企画し、実施できるように継続して支援していく。

（篠原、目崎）

大阪府

24日／大阪府の生活支援コーディネーター養成研修が開催され、SCと行政職員59名が参加。当財団のほか、同府内のSC経験者等もファシリテーターとして協力した。目的は、生活支援体制整備継続に向けて、先輩SCや他地域のSCの話を聞いて、アイデアを自分の地域に生かすこと。

県外事例として、奈良県葛城市第1層SCの田口研一郎氏が発表を行った。SCとしてどのように生活支援体制整備の基盤づくりを行ってきたか、また、サービスが先行した取り組みではなく住民の話を聞き、じっくりと時間をかけ組織内で合意形成を図って進めたことや、新たな地域のキーパーソンをいかに見つけるか、関係機関とのネットワークづくり、住民と一緒に創出した



大阪府の生活支援コーディネーター養成研修の様子（1月24日）

活動、S
Cを引継
ぐ際のポ
イント等
が事例と
ともに紹
介された。
続くグ
ループワ
ーク①の
テーマは

「基盤整備」。基盤づくりで困っている現状や課題、そのために工夫していることを話し合った。SCになって1年未満の参加者が多く、「顔や名前を覚えてもらえない」「誰に話を聞きたいか」「誰に話しかけるか」「どのよう
に地域づくりを進めていけばいいの
か」「男性の高齢者の参加が少ない」
「居場所の担い手やキーパーソンがい
ない」等の意見が出た。
グループワーク②は、「ニーズと担
い手の掘り起こし&支え合い創出」。

「代表者から反対があつて有償ボランティアの取り組みが進まない」「毎回
同じメンバーの交流になってしまふ」
等の課題が上がった。工夫として、
「ケアマネ部会などで地域課題を聞
く」「個別ケースで支援している民生
委員に声をかける」「市営団地など小
規模でアンケートを取る」「包括の介
護予防教室に行く」などグループ内で
具体的な取り組みが共有された。

発表では、「協議体が形式的な話の
場になっている」「高齢者のことが中
心になっている。助け合いは若い人が
入ってこそ。子育て世代や子どもが入
ることで高齢者が元気になる。地域の
活性化、みんなが住みやすく、つなが
りがある地域」等の意見が出た。

また、財団・目崎からミニ解説とし
て、協議体の機能や役割、助け合い創
出の3*ステップ、SCの役割を紹介し
た。また、まとめて財団から、「協議
体は1度つくって終わりではない。地
域に足を運び、地域の皆さんで、こん

な地域になったらいいな」を一緒に話
し合いました」と伝えた。

来年度以降、「本音で語ろう！情報
交換会」との連携も考えていく予定で
ある。
（篠原、目崎）

生活支援体制整備事業 関係者意見交換会に協力

東白川村（岐阜県）

10日／東白川村のSCから相談を受け、
生活支援体制整備事業関係者と当財団
で意見交換を実施。村役場の村民課と
介護保険課、村社協が参加した。事業
推進に向けては、小規模自治体ゆえの
難しさもあるが、だからこそ住民主体
の実践の重要性が高まっているとして、
この事業の位置付けを明確にすると
もに継続的に取り組む必要性を確認で
きた。
（長瀬）

宿毛市（高知県）

24日／宿毛市で、生活支援体制整備事
業に関する関係者の意見交換会を開催
した。同市の第2層協議体は前向きな

* 3 ステップ：ステップ①体制づくり、ステップ②ニーズと担い手の

構成員が自発的な活動が続けている。今回は今年度の現場の状況を振り返るとともに、次年度の本事業推進に向けた方向性を確認した。当財団からは他の自治体等の事例も紹介し、本事業の重要性を再確認することができた。今後の地域の活動創出に期待がかかる。

(長瀬)

地域活動交流会に協力

小平市（東京都）

26日／小平市地域包括支援センター中央センター企画の「令和4年度地域活動交流会」が実施され、当財団が講師を務めた。参加者約80名。参加対象は、すでに居場所・通いの場を実施している活動団体、まだ活動していない認知症支援リーダー、介護予防リーダー。

令和3年度に行われたこの交流会で、活動団体の課題や悩みとして一番多かったのはコロナに対する感染の不安、その次に多かったのがスタッフ不足や高齢化に伴う後継者不足だった。そこ

で、人材確保という視点での居場所運営の後方支援、および活動の活性化と団体同士の交流、居場所運営者の抱える課題解決を目的に今回開催された。

第1層SCの加藤恵利氏より、この交流会の目的が説明された後、第1部として財団から居場所・通いの場がなぜ大切なのかを説明した。

第2部は、4名の団体代表から担任手確保の工夫や取り組みに焦点を絞って発表が行われ、財団から工夫のポイントをコメントさせてもらった。

第3部では、交流会「ほかの居場所運営スタッフと情報交換してみよう」と題して、近隣同士の活動者でグループとなり、担任手確保も含む居場所の工夫点と、今後やってみたい活動について話し合われた。

その後の全体発表では、「お互いに得意なことを出し合って活動していこう」「活動者同士で協力し合って活動を実施する方法もある」といった発表があった。また、「その人が過ごしや

すいように配慮することや、やってみたい活動を挙げたらさっそく来てほしい」と依頼がありマッチングがうまくいった等の発表があった。

また、参加者には「地域活動交流会情報交換シート」として、事前に団体の活動内容や連絡先を集めてまとめた冊子が配布された。それを受けて財団からは、気になった団体や協力してもらいたい団体があったら連絡したり、現場視察をさせてもらうなどお互いに協力し合って活動を一層活性化させていきましょう、とまとめを行った。

終了後は、それぞれの発表内容をまとめた模造紙を事務局がホールに展示し、帰り際に参加者が見ることができるよう工夫されていた。今後やってみたい活動に、「家族を連れてくる日をつくりたい」「多世代交流のイベントをしたい」など、今後の担任手確保のきっかけになるような意見も出されており、参考になった様子。加藤SCもこの内容を後日まとめて参加者に配布

したい、と話していた。

既存の活動者同士の情報交換はネットワーク構築につながり、お互いが協力するきっかけや新たな活動立ち上げの際の現場視察先になるなどの効果がある。コロナ禍で活動が停滞している団体もある中、参加者にとってさまざまな面で有意義な時間となったのではないだろうか。

(岡野)

協議体の活動・編成等に協力

南部町（青森県）

23日／南部町で第2層の体制づくりを目的とした勉強会の1回目が行われ、当財団が講師を務めた。青森県のさわやかインストラクター葛原美恵子氏もアドバイザーとして一緒に勉強会を進めた。同町は隣県岩手県の研修会にオブザーバー参加し、個別支援を依頼するという積極的な町。今年度から第1層を町社協に委託、第2層は社協とNPOに委託し3圏域としている。第2層協議体を住民主体でつくっていか

と、この勉強会を企画した。この日は、生活支援体制整備事業の意義を理解し「目指す地域像」を話し合った。

主催者あいさつの後、地域包括支援センターの木村修子氏から「超高齢社会と南部町の現状と課題」として説明があった。続いて財団より「我がまちの『目指す地域像』を考えよう！」と題し講演。事業の意義と助け合いの効果を多様な事例とともに紹介した。続いて「目指す地域像」を4グループに分かれて話し合った。居場所、生活支援、見守り安否確認など多様な取り組みを広げたいという意見のほか、若い世代への働きかけや子どもたちとの交流等の意見が出され、課題だけでなく「やってみたい」こと、「実現したい」ことなどがたくさん共有された。そのためには仕掛けが必要。2回目の勉強会では、SCと協議体の役割を学び合う予定。

尾花沢市（山形県）

(鶴山)

12日／昨年10月に市民フォーラムを開

催した尾花沢市は、アンケートに記名した人を中心に2回の勉強会を開催し、1層・2層協議体の体制づくりを進めていく計画。この日は1回目の勉強会が開催され、山形県のさわやかインストラクター加藤由紀子氏と当財団が協力した。

最初に行政担当の高橋亜岐氏から町の現状と制度について説明があり、続いて財団より「目指す地域像について考えよう」と題してオンラインで講義を行った。その後、第1層SCの菅藤弘子氏と加藤インストラクターのバックアップで「目指す地域像」を話し合うグループワークを行った。協議体に参加したい、また、推薦したいという人や組織についてアンケートに意見を出してもらった。また、「世代間、地域間の交流の必要性を強く感じた」「きっかけづくりが求められているな」と思ったので、実行に移したいと思っています」「いろんなことの手助けがたくさんある。待っている人々の力にな

れたら良いかなと思った。それが、地域づくり、または自分のためにもなるような感じかなと思いました」などの前向きな意見が出された。2月に2回目をを行い、協議体の体制づくりを進めていく予定。

(鶴山)

東大和市（東京都）

21日／東大和市の第2層協議体は発足から4年を迎え、それぞれに活動の創出が行われているが、経年の中で、そもそも第2層協議体とは何かといった疑問も出てきているという。そこで、今後の活動へのヒントやモチベーションアップに向けて、第2層協議体を対象とした情報交換会が開催された。

行政担当課長のあいさつに続き、当財団から助け合いの大切さと協議体の意義について説明し、事例を紹介した。その後、グループワークで各協議体の活動内容と課題を共有し、課題解決に向けたアイデアを出し合った。

課題として、担い手や活動場所の不足、地域性の違いなどが出された。解

決策は、できる人ができることで活動に参加していくことがポイントとなり、自治会や老人会等の既存団体とのネットワークづくりや、企業への声かけ、その人の得意なことでの活動への協力依頼等で助け合いへの輪を広げていくことが大切ではないか、との意見が出た。

財団からも、例えば自分の特技を地域に披露できる機会を得たいと思っている人であれば、講師を依頼することで活動につながり担い手となってくれる場合もある、協力依頼の際に相手があることを求めているのかを聞くことで協力を得やすい、などと話した。

最後に、各SC・行政担当者から協議体メンバーにそれぞれの思いを語り、「これから一緒に話し合い活動を続けていきましよう」と呼びかけ、会を締めくくった。

(岡野)

羽咋市（石川県）

20日／羽咋市では中学校区を第2層圏域として、住民勉強会を開催しながら

第2層協議体を編成してきている。市内最大の人口規模となる羽咋地区では、地区住民を対象に21年度4回の住民勉強会（協議体準備会）を開催してきており、そこから手上げた住民有志による第2層協議体の発足式がこの日、羽咋公民館で開催された。メンバーの自己紹介や協議体の愛称を協議したほか、市長や社協会長からのエールもあった。財団はオンラインで参加しコメントした。

今後は月1回ペースで開催し、助け合いの実践に向けて動き出す。

31日／「羽咋市第1層生活支援協議体会議」が開催され、当財団もオンラインで協力した。編成されている第2層協議体からの取り組み報告、「地域支援合いサポーター」現況報告等を踏まえ、同市の支え合いについて、第1層協議体として今後取り組んでいくことを協議した。

(高橋)

鯖江市（福井県）

22日／鯖江市内の公民館区の一つであ

る立待地区での協議体準備会の2回目が行われ、当財団も協力した。「たちまちしゃべり場」と名付けられたこの準備会は、地域住民の誰でも関心のある人を対象にした勉強会。助け合いの意義と取り組みを3回に分けて丁寧に伝えていくことで、住民自身の手上げによる協議体参加を募り編成していくことを目的に開催されている。

内容は、担当SCからの振り返り、財団からの導入説明、グループワークで構成されており、今回は「困りごとの解決に向けて、自分たちでどんな『仕掛け』ができるか」をテーマに話し合った。次回が最終回の予定で、その後、住民による協議体を編成していく。

(高橋)

アドバイザー派遣事業に協力

海老名市（神奈川県）

12日／昨年10月の研修が延期となっていた海老名市で、市の状況を聞き、今後どのように進めていくか道筋を立て

るために、神奈川県のアドバイザー派遣事業として当財団の丹理事、沼上、さわやカインストラクター島津禮子氏が同市役所を訪問した。

生活支援体制整備事業を推進するために行政と社協だけが頑張るのではなく、住民や地域のキーパーソンを巻き込んだほうがよいこと、地域をまわること、この事業は評価や成果をロングスパンで考えることが重要、などと伝えた。

今後、行政と社協が連携をさらに強めると同時に、市役所内で事業をあらためて周知していくために、2023年度にアドバイザー派遣を活用して勉強会を開催すること等も検討しながら、進め方について連絡をもらうことになった。引き続き支援していく。（沼上）

南アルプス市（山梨県）

17・20・26日／南アルプス市が山梨県のアドバイザー派遣を活用し「支え合い地域づくり相談会」を3日間開催。当財団の鶴山がアドバイザーとして協

力した。同市は第2層が小学校区で16圏域に、また、自然発生的に第3層協議体が広がり51圏域で住民同士の話し合いや活動が広がっている（11ページ参照）。第1層SCの斉藤節子氏と第2層SCの小林陽一氏、行政の河野慎治氏が一緒になって長年にわたり勉強会を重ね、住民主体で協議体を立ち上げた。また、行政、社協、SCらが一体となり意見交換会を定期的に行いながら、協議体が主体的に地域づくりを進めていく後方支援を継続している。そのような中でも、協議体で悩みは出てくる。そこで、集合形式の勉強会ではなく、個別の「相談会」を開催し、外部から多様な事例やヒントとなる情報を提供して悩みを解決しようとするもの。

3日間で10組の協議体に参加。河野氏の司会で各協議体の代表・副代表が活動や課題をアドバイザーに相談。財団からの助言や質問をきっかけに、斉藤氏、小林氏、市社協事務局も一緒に

意見交換した。「自治会長の理解がない」「参加者が減ってきている」「活動がなかなか広がらない」「後継者がいない」などの悩みが出されたが、自ら必要と思い仲間と活動を継続してきたことや取り組んできた活動は素晴らしい。そこをあらためて共有し、「やってみたいことは？」と質問すると、さまざまな「やってみたい」が出される場面があり、気づきの機会になったようだった。

「あらためて目指す地域像を話し合ってみよう」「見守りについて他の組織と話し合い、勉強会を開催してみよう」など助け合いを広げる意見が協議体の皆さんからたくさん出され、住民の底力を感じた。また、いろいろな本音が素直に出る機会にもなり、SCに対する信頼感の大きさを、行政や協議の一体感も感じる機会となった。

市川三郷町（山梨県）

（鶴山、沼上）

27日／昨年11月、課長・係長を対象と

した庁内連携や、生活支援体制整備事業の理解を進めるための勉強会を開催した市川三郷町。今回は若手職員を対象に勉強会が企画され、山梨県のアドバイザーとして当財団が協力した。今回の目的は、庁内連携を進めるにあたり、有志でワーキンググループ（WG）を立ち上げることが目的でもある。

冒頭に、住民主体の地域づくりを進めるには、職員が一丸となり全庁で取り組んでいかなければならない

ことを依田誠二副町長がいさつで呼びかけた。続いて、町福祉支援課係長の鮫田かおり氏から「市川三郷町における生活支援体制整備事業」と題して大変分かりやすい説明が行われた。

また、町社協所属の第1層SC佐野泰史氏からは、「住民とともに進める地域づくり」オール市川三郷で支える」と題して、第1層協議体の活動やモデルとして取り組んでいる第3層協議

体の立ち上げにあたり住民に働きかけている取り組みや住民主体の地域づくりを進める気づきなどの話があった。

続いて財団・鶴山が「住民主体の地域づくりを進める行政の立場と役割」と題して基調講演。今後の人口減少社会において地域共生社会を推進するにはあらゆる事業において住民主体の地域づくりが必要と、事例として他市町村の庁内連携の事例を紹介した。



市川三郷町の若手職員勉強会の様子（1月27日）

最後に福祉支援課長の櫻井茂氏からのあいさつと、あらためて鮫田氏から「住民主体の地域づくりについて一緒に考えませんか」と呼びかけがあった。

参加者アンケートでは12名がWG参加への意思を示した。今後は、第1層協議体とWGの位置付け

を整理し、WGメンバーで話し合いを始めていく予定。また、議員に対する何らかのアプローチについても検討を進めていきたいとのこと。今後も支援していきたい。

(鶴山、沼上)

昭和町(山梨県)

16日/昨年11月に開催した市民フォーラムでアンケートに記名した人を対象とし、第2層協議体選出を目的とした1回目の勉強会が開催された。参加住民は23名。当財団は山梨県のアドバイザー派遣事業として協力した。

冒頭、塩澤浩町長からあいさつがあり、続いて第1層SCの金丸由希氏からフォーラムのアンケート内容の報告と、この勉強会の目的について説明があり「一緒に考えていきたい」との呼びかけがあった。

次に財団・鶴山より「我がまちの『目指す地域像』を考えよう」と題した講義を行い生活支援体制整備事業の意義を伝え、多様な住民が共に目指す地域像を考えていくことから始めてい

く必要性を伝えた。その後、3つの小学校区に分かれて目指す地域像についてグループワークを行った。熱い志の人が大変多く、会場全体に盛り上がりを感じた。昭和町は高齢化率19%と若いまちで、新住民の増加が続いている。新住民との交流や子どもと高齢者の交流でも、中高生などそれぞれの世代との関わりを意識した「やってみよう」とが発表で共有された。また、ボランティアをすることの喜びをもっと知ってもらいたいと、ボランティアの魅力や困っていることを頼みやすい環境について熱く語ったグループもあった。2回目の勉強会では、SCと協議体の役割を学び合い、第2層協議体の選出について意見を出し合う予定。

(鶴山、沼上)

田上町(新潟県)

18日/新潟県のアドバイザー派遣事業を活用し、第1層協議体メンバー対象の勉強会が田上町で行われ当財団も協力。同町は有償ボランティアを立ち上

げたいという狙いを持っているが、これまでオンラインで現状を確認しながら議論していくうちに、まずは体制を強化し、まち全体で住民主体の地域づくりを推進していくということになり、3回の勉強会を行うことになった。今回はその第1回。

最初に第1層SCの渡辺綾子氏から今回の勉強会の趣旨説明とアイスブレイクがあり、続いて、行政担当者の岡部里美氏から同町の現状とこれからについての説明があった。

財団より「我がまちの『目指す地域像』を考えよう!」と題し講演。多様な助け合いの事例を紹介しながら目指す地域像を考えることから始めることの必要性を伝えた。

続いて、「目指す地域像を考えよう」としてグループワークを行った。「あつまれみんな!!」「ウインウインの田上町」「地域の灯台を点しつづけよう」などのキャッチフレーズも各グループから出され、和気あいあいとした

中にも地域愛が広がる議論となった。その後、渡辺氏と岡部氏が振り返りを行い、第2回勉強会に向けて課題や進める方向を検討し相談があった。これからも一緒に考えながら進めていきたい。

(鶴山)

金沢市(石川県)

18日／「令和4年度第2回地域包括支援センターと生活支援コーディネーターの地域づくりに関する意見交換会」が金沢市で開催され、石川県のアドバイザー派遣事業として当財団が協力。同市内の包括、SC、市の政策福祉課を対象にしたこの会は、包括・SC・市が協働し住民主体の助け合い創出を推進していくための情報交換会で、昨年9月に開催された回の続きとなり、会場とオンラインのハイブリッドで行われた。

当財団からは助け合い活動の実践編として、協働・共感を広げる具体的なプロセスを説明。その後、市内3事例の取り組み報告が地区担当の包括とS

Cから紹介され、意見交換を行った。包括・SC・市の連携を推進するこの会は、23年度も開催する予定。(高橋)

東彼杵町(長崎県)

19日／長崎県のアドバイザー派遣事業として、東彼杵町で第1層協議体の理解と第2層選出に向けての勉強会が行われ、当財団が講師として協力した。同町はコロナ前にアドバイザー派遣で勉強会を行い、第1層協議体を選出した。その後、フォーラムを開催しようとして計画したところでコロナとなり、その後、地道に通いの場と移動支援を立ち上げてきた。しかし、コロナ禍で協議体が活発に活動でできなかったこともあり、ここであらためて基本を学び合い、住民への働きかけを協議体として取り組んでいこうと勉強会が企画された。

最初に健康はけん課課長の氏福達也氏からあいさつがあり、続いて第1層SCの末竹將司氏から「東彼杵町の事業開始からこれまでの活動の振り返り」

として説明があった。次に財団より「我がまちの『目指す地域像』を実現するために」と題して講義。生活支援体制整備事業の意義やSCと協議体の役割について、多様な市町村の取り組み事例を通じて伝えた。

その後、「今後の取り組みに向けての意見交換・質疑応答」の時間で理解を深め、何から取り組むかをみんなで議論した。「多様な事例を聞いていろんな仕掛けがあると感じた。個人的な話に終わらずに取り組んでいきたい。今から忙しくなる」など前向きな意見も出された。今後、第1層協議体はまずフォーラム開催に向けて第1層SCや行政と共に準備を始めていきたいとのこと。また、フォーラム後には2層協議体の体制づくりも検討していきたいと意欲的である。応援していきたい。

(鶴山)

(本稿は、岡野貴代、澤美杉、篠原徹、高橋望、鶴山芳子、長瀬純治、沼上悦子、目崎智恵子)

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。

新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2023年1月1日～1月31日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人 (55件)

(都道府県別50音順)

岩手県	重田 百合子	中井 郁子
大久保 孝信	鈴木 美智子	肥口 ふみ枝
山形県	滑川 里美	松下 明夫
高橋 寛人	藤本 裕一郎	柳 久美子
茨城県	松原 尚明	山谷 恵美子
池ノ上 和夫	三上 彬	吉田 信正
栃木県	東京都	神奈川県
菅野 安子	遠藤 英嗣	有賀 満雄
群馬県	櫻井 郁利	大澤 哲夫
角田 修一	下畑 穰治	川原田 武
埼玉県	杉野 隆宣	小山 俊司
新井 章子	鈴木 宏量	白井 哲三郎
中神 吉且	鈴木 広幸	中野 曹一
千葉県	添田 繁實	平井 昌利
阿部 美佐子	玉木 康平	圓山 賢吾
笹嶋 貢	鳥飼 重和	石川県

さわやかパートナー法人 (5件)

(50音順)

株式会社エーシーエ設計	株式会社島津製作所	NPO法人地域サポートの会	長野県生活協同組合連合会	株式会社ニフコ
-------------	-----------	---------------	--------------	---------

一般ご寄付 (13件)

(50音順)

岡添 ナオ子 (3千円)	岡添 弘 (3千円)	新谷 千晶 (3千円)	瀬口 卓也 (3千円)	中野 曹一 (2千円)	永末 厚二 (3千円)	山本 博子 (3千円)	匿名希望 (1万5000円)	匿名希望 (2万円)	匿名希望 (3千円)	匿名希望 (3千円)	匿名希望 (1千円)	匿名希望 (3千円)	匿名希望 (3千円)	匿名希望 (3千円)
--------------	------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	----------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------	------------

子ども・子育て市民委員会ご寄付 (1件)

吉田 旭雄 (9千円)

(ご寄付日付順)

NEWS

& にゅーす



2022（令和4）年度 「連合・愛のカンパ」 助成先が決まりました

立ち上げ支援プロジェクト

さわやか福祉財団では1997年以来、日本労働組合総連合会（連合）より組合員の方々のカンパ（連合・愛の

カンパ）をご提供いただき、地域のふれあい・助け合い活動の団体立ち上げ、新規事業立ち上げを初期運営資金面から支援しています。

今年度も、昨年10月12日から11月末まで当財団ホームページでの告知のほか、全国の社会福祉協議会や各地のNPOセンターにもご協力いただいて募集を行い、29都道府県78団体からご応募いただきました。

コロナ禍の収束はまだ見えない中ですが、ウィズコロナでの活動を工夫されている団体も多く、その中でも居場所づくりや子育て支援、フリースクール等の活動団体からの応募が目立ちました。また、生活支援コーディネーターやさわやかインストラクターからの推薦を受けた団体もありました。

今年度は、協議の結果、19団体に対して総額261万9000円の支援を行うことといたしました。個々の助成

先の名称、所在地は次ページの通りです。

四半世紀を越える長きにわたり資金を提供いただいている連合組合員の皆様に、深く感謝いたします。

現在、各地で生活支援コーディネーターの皆さんによる生活支援の活動や共生の居場所など、住民主体の助け合いを創出する動きが活発化しています。立ち上げや新規事業の際に柔軟に活用していただける本助成を、今後も各地の助け合いを広げるためにご活用いただければと思います。

全国の関係者の皆様に心より敬意を表しますとともに、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。（内田 信幸）



2022(令和4) 年度 「連合・愛のキャンパ」 助成19団体

- コミュニティサロン シオン (北海道札幌市)
- 子育て応援会 (宮城県仙台市)
- ささえあい協力隊 (中之条12・23区) (群馬県中之条町)
- LD 親子グループ (東京都渋谷区)
- ONE & ONLY (東京都練馬区)
- NPO法人 はまはっぴー (静岡県浜松市)
- たーね HEKINAN 子育て応援 (愛知県碧南市)
- 子どもアドボカシーセンター MIE (三重県桑名市)
- 元氣カフェ万葉 (福井県越前市)
- ワカモノ食堂 ひまわりカフェ運営実行委員会 (京都府京都市)
- みんなのひろば いろいろ (京都府向日市)
- NPO法人 太子橋生活サポートゆるりん堂 (大阪府大阪市)
- 子育てアラサークルたまふら (大阪府茨木市)
- 二名つながり委員会 (奈良県奈良市)
- アジア子ども基金 (兵庫県神戸市)
- 聴覚・サポートかけはし (岡山県笠岡市)
- 宇摩たすけあいネット (愛媛県四国中央市)
- NPO法人 未来育プロジェクト (愛媛県松山市)
- 車地区おたすけ愛隊 (大分県佐伯市)

■都道府県別応募と助成状況

●応募：29都道府県 78団体 ●助成：15都道府県 19団体

都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成	都道府県名	応募	助成
北海道	3	1	千葉県	6		福井県	2	1	和歌山県	2		大分県	1	1
秋田県	1		東京都	8	2	滋賀県	2		岡山県	1	1	宮崎県	2	
宮城県	7	1	神奈川県	4		京都府	4	2	鳥取県	1		熊本県	3	
福島県	1		静岡県	1	1	大阪府	6	2	広島県	1		鹿児島県	1	
群馬県	2	1	愛知県	4	1	奈良県	2	1	愛媛県	3	2	沖縄県	1	
埼玉県	1		三重県	2	1	兵庫県	4	1	福岡県	2		合 計	78	19

さわやか活動日記(抄)

〈2023年1月1日～1月31日〉



社会参加推進事業

社会人地域共生活動参加推進プロジェクト

高齢社会NGO連携協議会役員会開催

〔1月30日〕

高齢社会NGO連携協議会（高連協）の役員会が、オンライン形式にて開催された。樋口恵子共同代表（NPO法人高齢社会をよくする女性の会理事長）に出席いただき、役員7名が参加した。議題は、2023年度事業計画の方針を中

心に、今後の高連協の運営について協議した。23年度事業計画については、高齢者の地域社会参加推進に向けて、本年4月の「こども家庭庁」設立に併せて「高齢者のいきがいと確保しつつ、子ども中心社会を実現する地域社会活動を推進する」をテーマの柱の一つと



情報・調査事業

調査政策提言プロジェクト

して進めることとした。3月末の23年度事業計

画総会に向けて、計画をまとめたい。（玉置）

厚労省 地域づくり加速化事業

四国厚生支局管内ブロック別研修会に協力

〔1月24日〕

各厚生局単位で企画された、令和4年度地域づくり加速化事業ブロック別研修が行われている。

この日、四国厚生支局管内のブロック別研修会がオンラインで開催され、管内の県や市町村から32自治体146名が参加した。事前に学びたいこと等をアンケートで取り、企画

を進めた。テーマは「規範的統合」。多様な主体が参加して取り

組む地域づくりには、最初から共通の目的を持つことが重要。初めに、四国厚生支局地域包括ケア推進官の篠岡有雅氏が「地域づくりに向けた連携と事業間連動」として講義。また、厚労省の伴走支援を受けて取り組んだ静岡県西伊豆町や新潟県

長岡市が、実践報告として必要性を具体的に伝えた。

当財団は、「住民と共に目指す地域づくり」その課題と実現」と題して基調講演を行った。生活支援体制整備事業を通じた規範的統合の事例や、地域づくりにおける多様な課題を推進するためにも「住民に働きかけないと始まらない」として、住民が「自分事」と感じて主体的に地域づくりに参加していくにはどうすればよいか、全国的事例を紹介。住民主体による地域づくりの必要性を伝えた。

後半の意見交換では、香川県観音寺市支援のアドバイザーでもある

酒井やよい氏（NPO法人ふれあい福祉の会）やまびこヘルプ理事長・さわやかインストラクター）や、長岡市の支援に関わった新潟県も登壇者に加わり、篠岡氏の進行で規範的統合の大切さについて議論を行った。酒井氏からは、「各地で住民は

目指す地域像を話し合い、当たり前に規範的統合を行っている」との発言もあった。人口減少が進み担い手も財源も厳しくなる今後は、どの地域でも住民の声を聞き、住民の力を引き出していく必要性も共有した。（鶴山）

厚労省 地域づくり加速化事業

（観音寺市）

地域づくりフォーラムに協力

（1月31日）

地域づくり加速化事業の伴奏支援として関わっている香川県観音寺市の3回目の支援として、地域づくりフォーラムが市内ハイスタッフホールで開催され、

アドバイザーである酒井やよい氏と共に協力した。1月25日に2・5ミーティングで最後の詰めを議論し、観音寺市の皆さんは準備を進めた。四国新聞やケーブルテレビなどマス

コミからの発信や当日の取材もあり、多くの市民に周知されたフォーラムには300名ほどの市民が参加した。タイトルは「『どんなまちになったらええんかな？みんなで作えんな』観音寺市地域づくりフォーラム2023」。これまで話し合ってきたコンセプト「『あきらめんでえんで 望むくらしを最後まで』 つながる・支える・地域とともに」を多くの皆さんに伝え、参加している皆さんと議論し理解を広げ、充実していこうと取り組んだ。佐伯明浩市長のあいさつに続き、地域包括支援センター所長の和泉和子氏が地域の

みんなで大事にしたいこと（コンセプト）を紹介。その後のシンポジウムでは、地域代表として第1層生活支援コーディネーター宮武千恵子氏、ケアマネジャー代表として村地慶一郎氏、介護事業者代表として塩沢健太郎氏、地域包括支援センターの平口幸子氏が登壇し、アドバイザーでもある鎌田大啓氏（株式会社TRAPPE代表取締役）の進行によりそれぞれの立場での取り組みや、コンセプトに向けての議論が行われた。その内容を

受けて会場からたくさんの方が上がり、会場



全体で議論を深め共通理解を持つ機会となった。

会場には同市内に13ある協議体メンバーも多数参加し、つながりの必要性や「目からうろこ、サービスを初めて知った。今後もっと勉強していきたい」「このような機会をもっと持つてほしい」等の熱い意見で白熱したフォーラムとなった。関係者で何度も議論を重ねて生まれたコンセ

プトをフォーラムで多くの皆さんに伝え、議論し、正に規範的統合の機会となった。短期集中予防サービス（C型）があることで安心ということや、目指すコンセプトの実現には地域のつながりと支え合いが大切、という理解が広がった。地域のことを話し合ってきた協議体をはじめとする住民力を実感する機会にもなった。（鶴山）

事務所 事だより

●年度末となった。運営スタッフは事務所内などの整理整頓に取り組み中。30年近く前のものが保管されていたり、お宝を探すようで驚いたりワクワクしたり。きちんと整理して新年度を迎えましょう！

池田げんえいさん どうぞ安らかに



例年の全国交流フォーラムにはいつもお仲間たちと共に駆けつけてくれました（写真は2017年の挨拶時のお姿）

本誌『さあ、言おう』の表紙絵を1992年11月の創刊準備号から担当してくださっていた池田げんえいさん（本名・池田源英さん）が、2月13日に76歳で逝去されました。訃報を受けて、財団職員会議で黙祷を捧げました。

さわやか福祉財団の活動をずっと応援してくださっていたげんえいさん。「いきがい・助け合いサミット」の2つのシンボルロゴマークも、あれこれやりとりしながらげんえいさんが創り上げてくれました。あたたかな笑顔とそのお姿はずっと皆の心に残っています。どうぞこれからも天国からお見守りください。

（関連P2・巻頭言）

みんなの広場



各地の取り組みに
勇気づけられています

安田 幸二さん

(地域包括支援センター職員)

岐阜県

いつも楽しみに読ませていただいております。

昨年12月号で興味を持った記事は、巻頭言と村田幸子さんのエッセイ。参考になったのは、「活動の現場から」(奈良県葛城市、住民主体の移動・外出支援を創出)でした。生活支援体制整備事業担当として、各地の取り組みは、勇気づけられるとともに参考にさせていただいています。移動支援(買い物)をテーマに取り上げていただけたらと思います。

課題に挑戦しながら、住民の助け合いを一緒にどんどん広げていきましょう。

地道な活動が
伝わってきました

酒井 勝男さん 80歳

埼玉県

毎月ご送付いただきありがとうございます。

今回(1月号)は、「大船渡市からの感謝状」で久しぶりに丹理事のさわやかなお姿を拝見しました。地道な活動が伝わってきました。健康にご留意の上、ご活躍ください。

ボランティアによる生涯現役を実践してくれています！





あなたの意見を社会へ生かそう

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる
問題提起型情報誌です。

ぜひ皆様の声をお寄せください

『さあ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、NPOの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について など

投稿の方法

- 字数や回数制限はありませんが、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合があります。あらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。
ただし、掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前のほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添え下さい。大変参考になります。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX (03) 5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp



『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます（さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です）。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp



編集後記 ●「挑む！ 我らの地域づくり」は、静岡県藤枝市。市役所と市社協のチームワークの良さ、住民を尊重して取り組む姿に敬服しました（P4～）。●「活動の現場から」は、当財団との連携も長い山梨県南アルプス市。今回掲載の2団体以外にも、市内にたくさんの話し合いの場、住民主体の活動が生まれています（P11～）。●4月に2回目の子ども・子育てシンポジウムを開催します。ぜひご参加ください！（表紙裏）●本誌の歴史そのものである池田げんえいさん。ご冥福を心よりお祈り申し上げます（P2～「巻頭言」、P51）。

助け合いを
広げよう!

新
ひとりごと

浅野
史郎

障害者に会って

「かわいそうね」と声を掛ける人がいる。

「障害は不幸ではない、不便なだけだ」と

障害の本人は思っているのに。

「かわいそう」は差別の言葉。

不便なところを助けてやれば、

普通の人と対等になるのに。



- (公社) 日本フィランソピー協会会長、(株) 土屋・土屋総合研究所特別研究員
72歳で大学教員を卒業後、重度訪問介護の最大手に入社。「ライフワークは障害福祉」としていた
人生最後の仕事は、やりがいのあるもの。何たる幸運、何たる幸福。
『明日の障害福祉のために』(ぶどう社) など著書多数。(公財) 日本骨髄バンク業務執行理事も
務める。

「あきお」 3月号

通巻355号 2023年3月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
イラスト すずきひさこ
福島康子

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©

地域の力で子どもたちの共感力を育てる、
そしてシニアも元気になる

「ともあそび」を始めませんか？

子どもたちが、幼い頃から地域のいろいろな人と「あそび」を通じて
関わり合う中で、「共感力」を育ていける地域づくりを進めましょう！

子どもと遊ぶことで、シニアも地域もエネ
ルギーをもらい元気になれます。みんなで子
どもたちを育てる地域づくりに、当財団の「と
もあそび」冊子をぜひご活用ください。

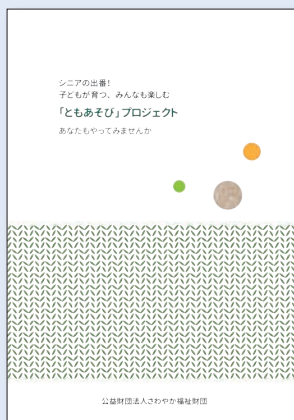


「どう遊ぶ？」QA

ともあそびの準備、遊び方、
関わり方、言葉かけのポイントから、注意点や保護者との
関わりなどをQ&A方式で分
かりやすく解説しています。

地域シニアが
子どもたちと共に遊ぶ
ともあそびへの
おさそい

ともあそびの種類や始め
方などを紹介しています。



シニアの出演！
子どもが育つ、
みんなも楽しむ
「ともあそび」
プロジェクト

あなたもやってみませんか
ともあそびプロジェクトの
提言書です。今、地域でと
もあそびを広げる意義、子
どもたちの成長などについ
て解説しています。

※当財団 HP トップページ→「ライブラリー」→「各種広報ツール」からダウンロードできます。

◎ お問い合わせは当財団まで ◎

電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp